

重紐をめぐる幾つかの問題(7)

—舌音の帰属その2—

吉池孝一・中村雅之

1. はじめに

吉池：前回の議論では、森博達(1983)の舌音B類説、平山久雄(1991)の舌音中間説、中村雅之(1992)の舌音A類説を見ました。

中村：舌音B類説は、舌音字が反切下字となる時にB類字に多く用いられることを根拠とする説です。しかしA類字に用いられる例外が多すぎることに難点がありました。他方の舌音中間説は、重紐の別が声母の口蓋化と非口蓋化の別であることを前提とした説です。その前提が反切上字の検討により否定されるからには、舌音中間説そのものが認められないということになります。

吉池：中村さんの舌音A類説ですが、C類(B類相当の介音を持つ)+舌音が、B類だけでなく、A類の被切字にも用いられることを合理的に説明するためには、舌音の介音をA類とせざるを得ないということですね。しかし、「上字C類+下字舌音」と「上字A類+下字舌音」、「上字C類+下字舌音」と「上字B類+下字舌音」のそれぞれを合計した原本切韻の反切をまとめた下記の表1(前回の表3を引用)に依ると、被切字A類の来母下字は33%で被切字B類の来母下字は67%です。被切字A類の知組下字は19%で被切字B類の来母下字は75%です。これを見ると、舌音は被切字B類に多く使われており、舌音A類説と矛盾します。この点をどのように解決するか、難点があるように思います。

表1. 来母・知組下字の百分率と実数()

被切字 \ 下字	来母	知組
幫 <sub>A</sub> 組	25(12)	6(1)
見 <sub>A</sub> 組	8(4)	13(2)
合計	33(16)	19(3)
幫 <sub>B</sub> 組	10(5)	6(1)
見 <sub>B</sub> 組	57(28)	75(12)
合計	67(33)	81(13)
総合計	100(49)	100(16)

中村：中村雅之(1992)は、B類字に付された反切のうち、下字が舌音(=A類介音)の場合、反切上字はC類字もしくはB類字なので、反切の口唱において、介音はA類に相当する下字を選択するのではなく、B類に相当する上字を選択した、と想定しました。もしも舌音をB類とすると、「上字C類+下字舌音」の反切の約3割がA類字に用いられる理由が説明できなくなります。そこで、まずは舌音をA類とし、かつ介音の選択において、上字を採るか、それとも下字を採るかについて、口唱時の“ゆれ”を認めれば、切韻の反切がすべて説明できることとなります。

吉池：韻書を編纂するような文人にとって、被切字の音は既知であった。その既知の音に照らして、上字をふさわしいとするか、下字をふさわしいとするかを定めた。そのような上字と下字を随意に選択することによって反切の矛盾を解決するということですね。

中村：その通りです。陸法言は切韻の反切を自ら作成したのではありません。すでに存在した数種の韻書を利用しています。その際、上字の介音を採用するか、下字の介音を採用するかの選択の“ゆれ”を認める口唱法に依り、雑多な切韻の反切を理解した。どうしても受け入れることのできない反切については修正したと考えています。

吉池：選択において“ゆれ”を認めるという事は、反切によって既知の被切字の音を“確認”するということですね。

中村：そうです。雑多な反切について、口唱によって正しい音が導き出せるかどうかを確認したと考えています。

## 2. 舌音における二種の反切

吉池：雑多な反切があることは事実です。私は、被切字A類の反切下字が舌音であるならば、反切作成時においてその舌音はA類と同様の介音を持っていたと考えます。また、被切字B類の反切下字が舌音であるならば、反切作成者にとってその舌音はB類と同様の介音を持っていたと考えます。そのようにするのが、単純で理に適っていると思うのですがいかがでしょう。

中村：舌音をA類とする反切を作ったグループと、舌音をB類とする反切を作ったグループがあり、切韻においてはその両者が混在しているということですね。私もそれが最も合理的だと考えます。すなわち“反切に依る限り”舌音A類説も舌音B類説も成り立たず、実際は両者が混在したものとなります。

吉池：問題は、切韻の編纂者（陸法言）が舌音をA類と見たか、それともB類と見たかですね。

中村：私が舌音A類説に立つのは、“ゆれ”を認める口唱法を通じて、反切を例外なく説明できることもあるのですが、それ以外にも、切韻や広韻における韻の分け方に明確に舌音の性格が見えるからです。韻の分合には編纂者の明確な意図が反映します。具体的には庚韻と清韻、そして真韻と諄韻を見れば、舌音がA類であることは明確です。

### 3. 分韻と舌音—庚韻と清韻の場合—

中村：まず、庚韻と清韻を見たいと思います。この二韻は以下を条件として、完全に補い合っています。

庚韻：2等韻、3等韻B類、于<sub>三</sub>、齒音二等

清韻：3等韻A類、舌音三等（来<sub>三</sub>、知組<sub>三</sub>）、齒音三等・四等、羊<sub>四</sub>

周法高(1948)<sup>1</sup>では、ベトナム漢字音において唇音A類がt、B類がp、C類がfのように反映することを根拠に、庚韻三等をB類、清韻をA類に分類しています。そこで、この分韻の音声的条件は何かということが問題になります。3等韻のうち、/-i-/介音を持っていたものが庚韻に、/-i-/介音を持っていたものが清韻に配置されたと考えれば、スッキリします。清韻は/-i-/介音の影響で主母音が前寄りになっており、庚韻と区別されたということでしょう。相配する上声・去声・入声も同様の状況です。

吉池：舌音三等は清韻にのみあるので、A類相当の介音をもっていたと考えるわけですね。

中村：はい。それ以外の解釈はないと思います。

### 4. 分韻と舌音—真韻合口と諄韻の場合—

中村：真韻合口と諄韻でも同じ状況が見て取れます。諄韻は原本切韻の段階では真韻に含まれていたのですが、増補改訂のある段階で真韻から分かれたようで、広韻では独立しています。分韻の条件は以下の通りです。

真韻：開口のすべて（唇音を含む）、合口B類、于母合口<sub>三</sub>

諄韻：合口A類、舌音合口三等（来<sub>三</sub>、知組<sub>三</sub>）、齒音合口三等・四等、日母合口<sub>三</sub>、羊母合口<sub>四</sub>

合口のA類だけが独立したわけですが、齒音合口とともに舌音合口三等もそのグループに入っています。時期は原本切韻の時代よりも下るとはいえ、舌音三等の介音がA類相当の/-i-/であったことの証左の一つと言えるでしょう。

---

<sup>1</sup> 周法高(1948)「古音中的三等韻兼論古音的寫法」『歴史語言研究所集刊』19, pp. 203-233。

吉池：真韻と諄韻の分韻は少々いびつに感じるのですが。

中村：そうですね。開口はA類とB類を分けず、合口においてのみ分かれています。このことについて、平山久雄(1962)<sup>2</sup>では、合口B類を [-wiɛ̃n]、合口A類を [-jyɛ̃n] のように想定し、合口A類においては円唇母音 [-y-] の影響で、主母音が精密には [ø] や [ɤ] に近くなっていた可能性が大きいとします。確かに、そのように考えれば、諄韻を独立させた理由は納得できます。

いずれにしても、清韻や諄韻に舌音三等（来<sub>三</sub>、知組<sub>三</sub>）がA類とともに組み込まれていることの意味は大きいと言えます。この状況を見て、なお舌音三等をB類だと主張するのはかなり厳しいのではないのでしょうか。

吉池：そうすると、切韻の編纂者は舌音をA類と見ていたということですね。“切韻の編纂の状況”から見て舌音はA類であったとして、“反切の状況”は舌音A類が少数派で、舌音B類は多数派です。この“反切の状況”の矛盾を解決するために、切韻の編纂者は反切口唱において、下字の介音を採用するのを原則としつつも、時に上字の介音を採用するという選択の“ゆれ”によって、雑多な反切を“確認”し、どうしても受け入れられないものは修正した、そのように中村雅之(1992)は想定したということですね。

## 5. 舌音をA類とするグループとB類とするグループ

中村：切韻の編纂者が舌音をA類とするグループに属していたことは確かです。それはそれとして、“舌音A類グループ”と“舌音B類グループ”の反切が、出現位置などについて偏りがあるかどうかを確認しておく必要はあります。

吉池：先に表1（前回の表3を引用したもの）で舌音を反切下字に持つA・B類被切字を挙げました。その内、少数派である“舌音A類グループ”の19例の分布を確認すれば見通しは付くかもしれませんね。

表2. A類被切字の舌音反切下字の実数

被切字 \ 下字	来母	知組
幫 <sub>A</sub> 組	12	1
見 <sub>A</sub> 組	4	2
合計	16	3

<sup>2</sup> 平山久雄(1962)「切韻系韻書の例外的反切の理解について」『日本中国学会報』14。

中村：一見した印象では来母字の使用が“舌音A類グループ”の使用の比率を上げているようです。

吉池：上田正(1975)により原本切韻中の“舌音A類グループ”の例を挙げると次の通りです。

表3. “舌音A類グループ”の例

平声 5 支韻：無し

平声 6 脂韻：無し

平声 17 眞韻：因（於鄰来母）、民（弥鄰来母）、賓（必鄰来母）、頻（符鄰来母）

平声 28 仙韻：篇（芳連来母）、便（房連来母）、綿（武連来母）、鞭（卑連来母）

平声 30 宵韻：無し

平声 39 庚韻：無し（A類無し）

平声 41 清韻：無し

平声 45 幽韻：無し

平声 46 侵韻：無し（A類は下字羊母の愔（於淫）のみ）

平声 47 鹽韻：無し（A類は下字羊母の厭（於鹽）のみ）

平声 49 蒸韻：無し（A類無し）

上声 4 紙韻：無し

上声 5 旨韻：匕（卑履来母）、牝（扶履来母）、癸（居誅来母）

上声 16 軫韻：無し

上声 26 獮韻：無し

上声 28 小韻：無し

上声 37 梗韻：無し（A類無し）

上声 39 靜韻：無し（A類は下字羊母の5例のみ）

上声 43 黝韻：無し

上声 44 {ㄨ+侵}韻：無し（A類無し）

上声 45 琰韻：無し（A類は下字羊母の厭（於琰）のみ）

上声 47 拯韻：無し（A類無し）

去声 5 寘韻：企（去智知組）

去声 6 至韻：弃（詰利来母）

去声 14 祭韻：無し

去声 21 震韻：無し

去声 31 線韻：無し

去声 33 笑韻：越（丘召知組）、驪（{田+比}召知組）

去声 42 敬韻：無し（A類無し）  
去声 44 勁韻：無し  
去声 48 幼韻：無し  
去声 49 沁韻：無し（A類無し）  
去声 50 沁韻：無し（A類は下字羊母の厭(於艶)の1例のみ）  
去声 52 證韻：無し（A類無し）

入声 5 質韻：無し

入声 15 薛韻：滅（亡列来母）、驚（并列来母）、子（居列来母）、嬰（扶列来母）

入声 17 昔韻：無し

入声 19 陌韻：無し（A類無し）

入声 24 葉韻：無し（A類は下字羊母の厭(於葉)の1例のみ）

入声 26 緝韻：無し

入声 29 職韻：憶（於力来母）

---

以上によると、幫<sub>A</sub>組の下字来母は13、下字知組は1。見<sub>A</sub>組の下字来母は4、下字知組は2。表4は幫<sub>A</sub>組の下字来母を12とするので、この一点が異なります。あるいは平山氏の見落としかもしれません。

中村：二つのグループの層があるかどうか明瞭ではありませんが、用例が韻毎に比較的にまとまっているという印象を受けますね。

吉池：切韻の底本として、舌音をB類とするグループによる反切を中心とした韻書があった。そこに、舌音をA類とするグループによる小韻の修正・増補が行われた。そのように想定するならば、上記の表5のような状況は説明できるのではないのでしょうか。

中村：切韻の層位については、遠藤光暁氏による一連の研究があります<sup>3</sup>。それらと突き合せれば、何らかの成果が得られる可能性はありますが、かなり根気のいる作業が必要になります。

吉池：その点は今後の課題ということにしておきましょうか。

---

<sup>3</sup> 遠藤光暁(1989a)『『切韻』反切の諸来源——反切下字による識別——』『日本中国学会報』41。

遠藤光暁(1989b)『『切韻』小韻の層位わけ』『青山学院大学一般教育論集』30。

遠藤光暁(1990)『『切韻』における稀少反切上字の分布』『中国語学』237。

中村：今回は舌音をA類とするグループ（切韻の編纂者）のほかに、舌音をB類とするグループがあったということを確認するに留めたいと思います。

## 6. 舌音をB類とする資料

中村：切韻と同時代（6～7世紀）の資料の中には、舌音をB類として扱っていたと見なし得るものが多数あります。たとえば、原本玉篇と玄應音義です。森博達(1983)<sup>4</sup>に数値がまとめられています。

吉池：前回の対談で見ましたね。以下に再度掲載します。前回は表1として出したものですが、ここでは表4とします。

表4

資料 反切 \ 帰字	原本玉篇		玄應音義		完本王韻		廣韻	
	A類	B類	A類	B類	A類	B類	A類	B類
C + 来 <sub>三</sub>	17%	14 <sub>93</sub> %	314%	18 <sub>86</sub> %	8 <sub>26</sub> %	23 <sub>74</sub> %	5 <sub>23</sub> %	17 <sub>77</sub> %
C + 舌 <sub>三</sub>	0%	9 <sub>100</sub> %	0%	8 <sub>100</sub> %	3 <sub>25</sub> %	9 <sub>75</sub> %	4 <sub>33</sub> %	8 <sub>67</sub> %
計	14%	23 <sub>96</sub> %	3 <sub>10</sub> %	26 <sub>90</sub> %	11 <sub>26</sub> %	32 <sub>74</sub> %	9 <sub>26</sub> %	25 <sub>74</sub> %
C + 齒 <sub>三</sub>	16 <sub>100</sub> %	0%	23 <sub>96</sub> %	14%	16 <sub>73</sub> %	6 <sub>27</sub> %	13 <sub>76</sub> %	4 <sub>24</sub> %
C + 齒 <sub>四</sub>	1 <sub>33</sub> %	2 <sub>67</sub> %	7 <sub>88</sub> %	1 <sub>12</sub> %	13 <sub>93</sub> %	1 <sub>7</sub> %	11 <sub>100</sub> %	0%
C + 日 <sub>三</sub>	3 <sub>100</sub> %	0%	10 <sub>100</sub> %	0%	3 <sub>75</sub> %	1 <sub>25</sub> %	2 <sub>67</sub> %	1 <sub>33</sub> %
計	20 <sub>91</sub> %	2 <sub>9</sub> %	40 <sub>95</sub> %	2 <sub>5</sub> %	32 <sub>80</sub> %	8 <sub>20</sub> %	26 <sub>84</sub> %	5 <sub>16</sub> %

\*原本玉篇と玄應音義には、例えばB類帰字の下字C + 来<sub>三</sub>の挙例を見ると、級：居立、急：居立のように反切が同じものが有る。森博達(1983)によると、この表の統計からは、そのようなものは除いたことである。なお、%は森博達(1983)には無い。いま参考までに付したものである。五種の反切のそれぞれについて、A類とB類の占める%を示したに過ぎない。

この表を見ると、原本玉篇と玄應音義において舌音下字がB類として用いられていることは認めてよさそうです。

<sup>4</sup> 森博達(1983)「中古重紐韻舌齒音字の帰類」『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念中国語学中国文学論集』、東方書店。いま森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店 315-330頁所収による。

中村：この他にも、佐々木猛(1983)<sup>5</sup>に興味深い指摘があります。「原本玉篇」『篆隸萬象名義』『博雅音』『經典釋文』の反切においては庚韻と清韻の通用例が多いのですが、その状況は佐々木氏によれば次のようです。「『原本玉篇』『篆隸萬象名義』『博雅音』『經典釋文』の反切において庚<sub>三</sub>韻字と清韻字とが相互に反切下字となるのは、実は庚<sub>三</sub>韻の牙音・唇音・照<sub>二</sub>組と清韻の知組・来母に限られていた。」(430頁)つまり、切韻で舌音(知組・来<sub>三</sub>)をA類扱いにするのとは異なり、「原本玉篇」『篆隸萬象名義』『博雅音』『經典釋文』の反切においては、清韻舌音をB類と見なしていたということです。

吉池：佐々木氏の用いた資料はいずれも南方のものですが、森氏の利用した玄應音義の音系の判断は簡単ではないようです。『中国語学辞典』(日本中国語学会編、2022年)【玄応《一切経音義》】の太田斎氏の解説によると「玄応音義は《切韻》(601年)と成書年代に近い資料で、音韻体系も《切韻》に酷似し、中国音韻史上重視される。但し玄応音義は、原本系《玉篇》の反切の字面を改めることなく大量に利用した結果、いわゆる江南讀書音の特徴が現れている。」(32頁)とあります。いずれにしても、切韻と同時代の資料の中には舌音をB類とするものが多数あったと考えてよいということになります。切韻で重紐音節の反切下字に舌音字が用いられる場合に約7割がB類に用いられるのは、先行する韻書の中にも舌音をB類としたものが多く、切韻はそれらを受け継いだということでしょうか。

中村：そう考えてよさそうです。ところが切韻の編纂者や改訂者は舌音をA類とする立場だったため、分韻において舌音をA類の側に入れただけでなく、反切においても3割ほどがA類音節の反切下字に用いられた。そういう混在を可能にしたのは、反切の適否の確認において時に上字の介音を採用するという口唱法であったと思います。

## 7. 反切上字は重紐の別を決するか

吉池：それでは、反切作成の段階において上字によって重紐を表記するタイプの反切と、下字によって重紐を表記するタイプの反切を混在させた、と考える必要はないということですね。舌音字に関しては、少なくとも反切作成の段階ではすべて下字が重紐の別を表していたが、切韻編纂の段階で舌音をA類とする反切とB類とする反切が混在した、と。

しかし、反切作成の段階ですでに上字が重紐の別を決していたように見える反切が幾つかあるわけで、それをどのように理解するかという問題があります。

中村：よく知られているのは、去声寘韻の次の3例です。

避：婢義反

---

<sup>5</sup> 佐々木猛(1983)「庚清韻贅説」『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念中国語学中国文学論集』、東方書店。



譬：卑義反

譬：匹義反

義はB類ですが、A類被切字の反切にも使われます。その場合、被切字がA類字であることは上字によって決せられます。これ以外にはどのようなものがあるでしょうか。

吉池：前回の議論で、平山久雄(1991)の反切使用をまとめた統計表を引用しました。それを再度提示すると表5(前回は表2とした)の通りです。なお、この表で注意すべき点は、A類とB類がそれぞれ二段に分かれていることです。点線の上段は反切上字にC類および「匹」を用いたもの。匹は本来A類ですがA・B・C類いずれの被切字にも用います。点線の下段は反切上字にA類もしくはB類を用いたものです。

このうち網掛け部分が問題の箇所です。もしも、舌音の知組と来組をA類相当と見るならば、ここも網を掛けなければならないのですが、舌音については、先にA類とするグループとB類とするグループが混在すると想定したので除きます。

表5(左は百分率、右括弧内は例数)

下字 被切字	幫 <sub>A</sub> 組	見 <sub>A</sub> 組	章組	精組	知組	来組	莊組	幫 <sub>B</sub> 組	見 <sub>B</sub> 組	合計
幫 <sub>A</sub> 組	21(8)	3(1)	44(17)	13(5)		18(7)			3(1)	100(39)
	25(7)	11(3)	29(8)	7(2)	4(1)	18(5)			7(2)	100(28)
見 <sub>A</sub> 組	6(4)	18(13)	61(44)	8(6)	3(2)	4(3)				100(72)
	10(1)	30(3)	30(3)	20(2)		10(1)				100(10)
幫 <sub>B</sub> 組			3(1)			8(3)		57(21)	32(12)	100(37)
		4(1)			4(1)	8(2)	4(1)	35(9)	46(12)	100(26)
見 <sub>B</sub> 組			3(5)	1(1)	7(11)	15(23)		7(11)	66(98)	100(149)
			6(2)	6(2)	3(1)	15(5)		18(6)	52(17)	100(33)
知 組			36(38)	8(8)	15(16)	33(35)			8(8)	100(105)
来 母		3(1)	44(17)	15(6)	18(7)				21(8)	100(39)
精 組	1(2)	2(4)	41(69)	34(57)	4(6)	13(22)			4(7)	100(167)
莊 組		2(1)	10(5)	2(1)	6(3)	24(12)	18(9)	2(1)	36(18)	100(50)
章 組		3(6)	73(167)	6(14)	3(7)	11(26)			4(8)	100(228)

中村：先ほどの義を反切下字とする3例は右上の部分です。幫<sub>B</sub>組の被切字に見<sub>A</sub>組の下字が用いられるものが1例ありますが、これは去声幼韻の「謬(靡幼反)」です。眞韻の義がA類にも用いられる理由は分かりません。幼韻の例については、上田氏や平山氏が謬をB類とするのは類相関によったものですが、韻鏡で謬が4等に置かれていることや、そもそも幼

韻には小韻が 3 つしかないため使用できる反切下字が限られているなど、考慮すべき問題がいろいろとあるので、今は考察の対象から外してよいかと思います。したがって、用例数から見ても、問題になるのは章精組が下字になる場合です。

「C類+章精組→B類」と「B類+章精組→B類」は、A類的とされる章組と精組が反切下字にあるにもかかわらず、それには依らず、反切上字によって重紐の別が決められているように見えます。章精組の反切下字は圧倒的にA類被切字に使用されますが、僅かとも言い得るB類被切字の 11 例をどのように見るかということですね。なお、平山久雄(1991)の 3-4 頁によると日母と羊母を章組とします。また、上田正(1975)は「飢(居脂<sub>章母</sub>)」(平声脂韻開口見母)および「髻(渠脂<sub>章母</sub>)」(平声脂韻開口群母)を重紐B類としますが、平山久雄(1991)はA類として表を作るので注意が必要です。

吉池:上田正(1975)に依り、この 11 例に相当すると思われるものを挙げると次の通りです。  
※は切韻系韻書の反切の状況です。平山氏がA類とする飢(居脂<sub>章母</sub>)と髻(渠脂<sub>章母</sub>)には【】を付し、とりあえず除くことにしました。

表 6 反切上字が重紐の別を決する 11 例

平声 5 支韻	為(遼支 <sub>章母</sub> )	※切 <sub>一</sub> 切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> P3696-1 広(遼支 <sub>章母</sub> )
平声 6 脂韻	【飢(居脂 <sub>章母</sub> )】	※切 <sub>一</sub> 切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> (居脂 <sub>章母</sub> )、広(即夷 <sub>羊母</sub> )
	【髻(渠脂 <sub>章母</sub> )】	※切 <sub>三</sub> 王 <sub>三</sub> 王 <sub>三</sub> P3696-1 広(渠脂 <sub>章母</sub> )、切 <sub>二</sub> (渠指 <sub>章母</sub> )
平声 17 眞韻	無し	
平声 28 仙韻	嗎(許延 <sub>羊母</sub> )	※切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> 広(許延 <sub>羊母</sub> )、P2014-3 背(許乾 <sub>群B類</sub> )
平声 30 宵韻	無し	
平声 39 庚韻	無し	
平声 41 清韻	無し※B類無し	
平声 45 幽韻	無し	
平声 46 侵韻	無し	
平声 47 鹽韻	無し	
平声 49 蒸韻	無し	
上声		
上声 4 紙韻	無し	
上声 5 旨韻	無し	
上声 16 軫韻	斬(宜引 <sub>羊母</sub> )	※切 <sub>一</sub> 切 <sub>二</sub> 王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> 広(宜引 <sub>羊母</sub> )、王 <sub>二</sub> (宜忍 <sub>日母</sub> )
上声 26 獮韻	無し	
上声 28 小韻	矯(居沼 <sub>章母</sub> )	※切 <sub>三</sub> 王 <sub>三</sub> P3693(居沼 <sub>章母</sub> )、広(居夭 <sub>影母B類</sub> )

	<b>矯</b> (巨小 <sub>心母</sub> )	※王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> (巨小 <sub>心母</sub> )、切 <sub>三</sub> (在 <sub>小</sub> <sub>心母</sub> )、広 (巨 <sub>天</sub> <sub>影母B</sub> 類)。上田氏は (在 <sub>小</sub> ) を誤写とする。
上声 37 梗韻	無し	
上声 39 靜韻	無し※B類無し	
上声 43 黝韻	無し※B類無し	
上声 44 寢韻	<b>吟</b> (丘甚 <sub>常母</sub> )	※切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> P3693 広 (丘甚 <sub>常母</sub> )
上声 45 琰韻	<b>貶</b> (方冉 <sub>日母</sub> )	※切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> P3693 (方冉 <sub>日母</sub> )、広 (方 <sub>斂</sub> <sub>来三</sub> )
去声 5 寘韻	<b>偽</b> (危賜 <sub>心母</sub> )	※王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> P3696-2 (危賜 <sub>心母</sub> )、王 <sub>一</sub> (危{貝爲} <sub>見母B</sub> 類)
去声 6 至韻	無し	
去声 14 祭韻	無し	
去声 21 震韻	<b>韻</b> (永賁 <sub>從母</sub> )	※S6176 (永賁 <sub>從母</sub> )、王 <sub>二</sub> (永 <sub>燼</sub> <sub>從母</sub> )、王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> (爲 <sub>拊</sub> <sub>見母B</sub> 類) 広韻は韻を問韻運小韻に入れる。 下字「拊」は王 <sub>三</sub> の震韻{才+糜}小韻の下にある。{才+糜}字には「古音居韻 <sub>見母B</sub> 反今音居運 <sub>見母問韻三等反</sub> 」とある。今音の居運反の運は問韻であり、問韻には小韻「拊 <sub>居運反</sub> 」が有る。王 <sub>一</sub> には欠落があるがほぼ王 <sub>三</sub> と同じ。なお、王 <sub>二</sub> にも問韻に小韻「拊 <sub>居運反</sub> 」が有る。以上に依ると、「韻」の“今音”は重紐韻の震韻ではなく問韻である。広韻は“今音”に依って問韻としている。
去声 31 線韻	<b>躄</b> (於扇 <sub>書母</sub> )	※王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> 唐広 (於扇 <sub>書母</sub> )
去声 33 笑韻	無し	
去声 42 敬韻	無し	
去声 44 勁韻	無し※B類無し	
去声 48 幼韻	無し	
去声 49 沁韻	無し	
去声 50 豔韻	無し	
去声 52 證韻	<b>鷹</b> (於證 <sub>章母</sub> )	※王 <sub>一</sub> 王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> 唐 P3694 表広 (於證 <sub>章母</sub> )
入声 5 質韻	無し	
入声 15 薛韻	無し	
入声 17 昔韻	無し※B類無し	
入声 19 陌韻	無し	
入声 24 葉韻	<b>痲</b> (去涉 <sub>常母</sub> )	※切 <sub>三</sub> 王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> 唐 P2015-3 広
入声 26 緝韻	無し	

中村：表 6 には平山氏の表 5 の統計数と異なる所があります。整理すると次のように 12 例となります。表 6 と表 5 の数字が異なる部分は表 5 の疎漏でしょう。

C 類＋章組→B 類 8 例 ※表 5 は 6 例とする

【飢（居脂<sub>章母</sub>）、髻（渠脂<sub>章母</sub>）】、矯（居沼<sub>章母</sub>）、圻（丘甚<sub>常母</sub>）、軀（於扇<sub>書母</sub>）、  
膺（於證<sub>章母</sub>）、瘡（去涉<sub>常母</sub>）、嗎（許延<sub>羊母</sub>）、鉞（宜引<sub>羊母</sub>）、貶（方冉<sub>日母</sub>）

B 類＋章組→B 類 1 例 ※表 5 は 2 例とする

爲（遠支<sub>章母</sub>） ※遠は上声紙韻の爲（爲委反）小韻の下にあるので B 類  
「爲」の上声に相当する。

C 類＋精組→B 類 2 例 ※表 5 は 1 例とする

驕（巨小<sub>心母</sub>）、韻（永費<sub>從母</sub>）

B 類＋精組→B 類 1 例 ※表 5 は 2 例とする

偽（危賜<sub>心母</sub>）

吉池：以上の 12 例は、反切下字によるならば A 類としか判断できないものです。これらが B 類であることは反切上字の介音によってしか表現されていません。反切としては異例に見えます。

中村：反切の作成段階において、求める介音は下字によって表現されるのを原則としたであろうという想定が当てはまらないということですね。

吉池：これらは反切の作成段階からこのような状況だったのでしょうか。

中村：「B 類＋章組→B 類」の「爲（遠支<sub>章母</sub>）」については、作成段階においても上字によって重紐を表記するタイプのものであったと推測されます。この例に関しては、遠藤光暁(1989)<sup>6</sup>に詳しく説明されています。「爲（遠支反）」という反切を見ると、重紐 B 類のみならず、合口も上字で表現されており、かなり異例と言えますが、遠藤氏によれば、これは底本の一つである呂静の『韻集』で支韻開口と支韻合口を分けていたのを、切韻で一つの韻としたことによるということです。「“爲”に対して開口下字“支”という反切下字をつけておけば、呂静『韻集』の“為韻”を『切韻』では“支韻”に入れることを示すのに更に有効である。」(95 頁)つまり編纂上の必要から、あえて異例の反切を用いた例ということになります。

---

<sup>6</sup> 遠藤光暁(1989)「『切韻』小韻の層位わけ」『青山学院大学「論集」』第 30 号、pp. 93-108。

吉池：興味深い議論ですね。それ以外として、下記の5例は、切韻系韻書の中に章精組以外の下字が有りB類及び来母となるものです。たとえそれが広韻など後代の韻書であったとしても、切韻原本の反切を何らかの理由で継承している可能性があります。

矯 (居沼 <sub>章母</sub> )	※切 <sub>三</sub> 王 <sub>三</sub> P3693 (居沼 <sub>章母</sub> )、広 (居夭 <sub>影母B類</sub> )
驕 (巨小 <sub>心母</sub> )	※王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> (巨小 <sub>心母</sub> )、切 <sub>三</sub> (在 <sub>小心母</sub> )、広 (巨夭 <sub>影母B類</sub> )
貶 (方冉 <sub>日母</sub> )	※切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> P3693 (方冉 <sub>日母</sub> )、広 (方斂 <sub>来三</sub> )
偽 (危賜 <sub>心母</sub> )	※王 <sub>一</sub> (危賜 <sub>見母B類</sub> )、王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> P3696-2 (危賜 <sub>心母</sub> )
韻 (永費 <sub>徒母</sub> )	※S6176 (永費 <sub>徒母</sub> )、王 <sub>二</sub> (永燼 <sub>徒母</sub> )、王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> (爲拊 <sub>見母B類</sub> )

中村：少し強引な印象は受けますが、仮に吉池さんの議論を認めたとして、爲 (遠支<sub>章母</sub>) の例と合わせると6例であり、残るは取り消し線以外の6例ですね。

C類+章組→B類 6例

【~~釧 (居脂<sub>章母</sub>)~~、~~髻 (渠脂<sub>章母</sub>)~~】、~~矯 (居沼<sub>章母</sub>)~~、~~圻 (丘甚<sub>常母</sub>)~~、~~軀 (於扇<sub>書母</sub>)~~、~~膺 (於證<sub>章母</sub>)~~、~~痲 (去涉<sub>常母</sub>)~~、~~嗎 (許延<sub>羊母</sub>)~~、~~鉞 (宜引<sub>羊母</sub>)~~、~~貶 (方冉<sub>日母</sub>)~~

B類+章組→B類 0例

~~爲 (遠支<sub>章母</sub>)~~

C類+精組→B類 0例

~~驕 (巨小<sub>心母</sub>)~~、~~韻 (永費<sub>徒母</sub>)~~

B類+精組→B類 0例

~~偽 (危賜<sub>心母</sub>)~~

吉池：残った6例を論じるのは大変です。6という数字から見ると、あるいは何らかの理由に依る例外として扱って良いかもしれません。今後の課題ですね。

中村：このように下字ではなく上字によって介音を表現する反切がなぜできたかは分かりませんが、切韻の編纂にあたっては、“ゆれ”を容認する口唱法によって意図する音が求められるので、それを採用することに支障はなかったものと思われます。

吉池：今回は、課題が目立ちやや遺憾ではありますが、舌音の帰属についてこれまでとはやや異なる考えを提示することができたという点において一定の意義があったのではないのでしょうか。すなわち、舌音をB類として韻書を作成したグループと、A類として韻書を作成したグループがあった。切韻の編纂者や改訂者は舌音をA類とする立場だったため、分韻において舌音をA類の側に入れただけでなく、反切においても3割ほどがA類音節の反切下字に用いられたということです。

切韻において上記のような反切の混在を可能にしたのは何かということと、反切の上字下字選択の“ゆれ”との関係も私なりに納得することができました。反切の適否の確認において、時に上字の介音を採用するという口唱法によって雑多な反切を理解したということですね。別の言い方をすると、切韻に存在する雑多な反切の適否の“確認”において、時に上字、時に下字を選択するという反切の選択によって、反切の混在を認めたという事であって、上字下字選択の“ゆれ”を認めることと、反切自体に上字と下字によって重紐の別を決する反切を認めることとの間には直接の関係は無いということです。この点について、私はこれまで誤解をしていたようです。

それでは今回はこれまでとしましょう。次回は重紐の類相関を利用した音価推定の仕事について、それが妥当であるかどうか検討したいと思います。